

## インターナショナル・レコード・レビュー 2007年2月

### 『ジュネーヴ詩編歌』 スウェーリンク

・・・中略

これまで BIS はシンガポール・シンフォニー、マレーシア・フィルハーモニック・オーケストラ、バッハ・コレギウム・ジャパンのレコーディングによって、アジアの音楽家の紹介に貢献してきた。今回 BIS はアジアの隠された驚きである神戸の神港教会の驚くべきオルガンに目を向けている。大震災によってこの都市が世界に注目されてから 12 年。今、神戸から現れたもう一つのできごとは、より積極的なメッセージ世界に向けて発信するに違いない。

2002 年、マルク・ガルニエによって建造された神港教会（改革派教会）の 18 ストップのオルガンは、ブックレットのノーツに「日本で最も熱心な会衆讃美」と表現されているように、会衆讃美を目的として作られたものである。会衆讃美には 1562 年にジャン・カルヴァンとテオドール・ド・ベーズによって編纂されたジュネーヴ詩編歌が用いられ、オルガンは 17 世紀中葉の北ドイツとオランダの様式をモデルとしている。調律はミーントーンで、ペダルと二つの手鍵盤のそれぞれの最も低い 4 つの黒鍵は無く、上部 3 オクターヴではいずれもミ とレ、ラ とソ が別々の黒鍵になっている。このことはオルガンをリサイタルの楽器として用いるには制約といえるが、それによって詩編歌やスウェーリンクの作品を真の意味で演奏する理想的な楽器となっている。

鈴木雅明はバッハ・コレギウム・ジャパンとの活動によってふさわしい脚光を浴びてきたが、バッハのカンタータの指揮者としてだけでなく、スウェーリンクの器楽作品の解釈者としても非常に卓越した演奏家である。オルガンのこういった制約の中で、彼は演奏を通して音楽的関心を表し、その演奏はスタイリスティックな誠実さと妥協なき音楽家精神において人を動かさずにはおかない。彼はトン・コープマンの弟子であったが、特に鮮やかなフレージングや非の打ち所の無いアーティキュレーションを通してその血統はあらわされている。コープマン特有のあでやかな装飾はかなり控えられているが、時折駆け抜けるような装飾もみられ、とりわけ「ファンタジア・クロマティカ」においてそれは最も顕著である。

詩編歌に基づくスウェーリンクの作品に関しては、鈴木はその目的に適った敬虔さでそれらを取り扱っている。スウェーリンクの詩編歌作品に先立って鈴木は其々の旋律を演奏しており（なぜ彼が以前バッハの『クラビーア練習曲集第 3 巻』を BIS で録音したときのようにここで歌を用いなかったのか不思議ではあるが）それによってディスク全体が、敬虔な詩編旋律、装飾的なプレリュード（とりわけ詩編 36 編は生氣溢れる作品である）自由なファンタジアのうまく連携したコレクションとなっている。これらの録音はすべて印象的でありながら威圧的でない緊迫感を有している。

マーク・ロチェスター

グラモフォン 2007年2月

スウェーリンク 『ジュネーヴ詩編歌』

・・・中略

### 初期鍵盤音楽のマエストロの力強い擁護者

難解なタイトルかもしれないが、鈴木雅明はヤン・ピーテルスゾーン・スウェーリンクが近代鍵盤音楽の父であるという確信を持って、トッカータと詩編歌作品を生き生きと組み合わせたプログラムに果敢に挑戦している。すでに教会での専門家のリサイタルではなじみがあるが、ここに純粋なコンサート音楽としてその喜びを刻んだディスクが現れた。オルガンは17世紀初頭スウェーリンクの時代には礼拝で用いられていなかったが、自由流麗で制約の無いトッカータと叙情的な詩編歌のパラフレーズが、それぞれにふさわしく確信を持って光彩を放っている。

鈴木は神戸の神港教会の新しいマルク・ガルニエのオルガンを演奏しているが、それは改変できぬ真実とバランスをもつ楽器で、それぞれのレジストレーションはスウェーリンクの美しく方向性を持ったライン（それらは常に言葉のフレージングの論理に彩られている）と多彩なリズムの真髄に到るように思われる。詩編歌23と116には幾分厳粛さがあり、カルヴァンのジュネーヴ詩編歌のまじめさが明確にあらわされているが、他方、「ファンタジア・クロマティカ」では陰気さが存在するだけで、クリストファー・ヘリック（ハイペリオン、03年11月）による演奏の方が凝集性に富んでいる。

鈴木は、他の曲で、詩編歌の色彩に富んだ可能性と内省的な性質に深い感受性を示し、トン・コーブマンが1981年から進めている移り気な鍵盤作品全集（フィリップス）に比べはるかに作品への集中度が高い。「エコー・ファンタジア」は特に満足のいく作品であり、鈴木はあたかもそれがファベルジェ（訳注：Peter Carl Faberge, 1846-1920, ロシアの金細工師、王室などに重んじられた）の卵であるかのように優しく解いてゆく。ノーツは非常に退屈で、聞き手をスウェーリンクの優れてコミュニカティブな芸術に引き込もうとする努力が全く見られない。しかしながら、演奏は一流である。

ジョナサン・フリーマン アットウッド？